

序 章

はじめに

九州には平安時代に遡る笠塔婆や層塔，鎌倉時代から戦国時代にわたる中世の五輪塔・宝篋印塔・宝塔などの石造物が数多く残り，今も大切に守られている。板碑もそのうちの一つだが，石造物を考古学の研究対象として型式論や分布論が盛んに議論され，歴史資料として評価するようになったのは1980年代以降であろう。仏教美術の視点や金石文の研究は近世にまで遡るものの，今日では考古学の方法を用いた石造物の研究が全国的に広まり，研究蓄積も膨大な数にのぼっている。

本書も型式論・分布論・用途論を主眼とした考古学の視点に立って「九州の板碑」について論及するが，九州の中で板碑は主流となる石造物ではない。どちらかといえば，分布に偏りのある少数派になるだろうか。とはいえ，造立総数は数千単位であって，決して希少な石造物ではない。その板碑を本書の対象とした理由には，二つある。

一つは，五輪塔・宝篋印塔など複数の部材を組み合わせて造立される石造物は，当初の組み合わせを失っている資料があるのに対して，板碑は基本的に一石で作られているため，型式論的なアプローチにノイズを気にする必要がないこと。もう一つは，紀年銘や造立趣旨を刻む資料が他の種類の石造物に比べて相対的に多く，情報量が豊富であること。

個人的なことだが，筆者が最初に石造物に関心をもったのが板碑であったことも理由のうちにあるが，ようするに考古学的な研究方法としての型式分類と相対編年を組み立てるうえで，実年代の比定にブレがさほど起きない板碑は，歴史研究の対象として最適であることが第一の理由なのである。

もちろん，層塔・笠塔婆・五輪塔などの他種類の動向も組み合わせて，板碑

の分布・型式変化・年代観などを分析しなければならないが、九州の板碑に関しては分布や型式変化を捉えた研究は少なく、他の種類との関わり具合や影響関係などを考察できる段階には到達していないのが現状なのである。したがって、本書では、九州の板碑がどのような分布を示し、いかなる形態的特徴をもっているのか、時代ごとの型式変化を把握したうえで、板碑の通時代的な変遷過程を解き明かし、板碑のもつ歴史的な位置づけを明らかにすることを第一の目的に定めることにした。

焦点を板碑に絞るため、九州の石造物全体を捉えることはしないが、板碑は他の種類の石造物と同じく、あくまでも仏教文物であって、人々の信仰や造立された当時の社会背景、宗教勢力との関係なくしては存立しえない歴史資料である。素材は板碑であっても、本書に示した成果のいくつかは、必ず他の種類の石造物を考えるうえでのヒントになるのではないかと考えている。

1. 板碑の定義をめぐって

さて、当たり前のように板碑の文言を使ってきたが、本書の前提として、まずは板碑とは何かを定義しておこう。板碑の定義に関わる研究史は第1章で整理するが、筆者は板碑のもつ二つの要素、つまり形態と内容(趣旨)の両方を備えているものを板碑と捉えている。

形態は「整形板碑」と「自然石板碑」の二つに大きく分類できる。整形板碑とは、頭部を山型に造り、額部に二条線をもち、碑身部に本尊としての梵字種子あるいは像容を表し、その下に造立年月日・願文・偈文などの銘文を記すという形態的・内容的両面を兼ね備えた石造物である(原田2002b・2003a・2003b)。一方の自然石板碑とは、石材にあまり加工を施さず、形も整えず、梵字種子などを表している石造物である。自然石板碑の内容(趣旨)は整形板碑と変わりはなく、違いは整形されているかどうかである。

整形板碑と自然石板碑が共有する最も重要な要素は、内容(趣旨)にある。いわゆる本尊であるところの梵字種子や像容を表現し、造立年月日・願文・偈文などの銘文を、石面の1か所に刻み込む「一観面」(坂詰1982)であることを強調しておきたい。五輪塔・宝篋印塔などが基本的に四面に梵字種子などを刻ん

でいるのとは明らかに異なる特徴であり、板碑とは何かと問われれば、基本的に「一観面」の石造物であると定義したい。

以下に本書の構成と各章の課題を紹介しながら、本書のめざすところを明らかにするが、考古学の方法で捉える板碑は、形態の変化であったり、石材や加工の違いであったり、分布域の濃淡であったりと、目に見える現象面が主体になる。板碑の本質である人々の信仰心にまで分け入ることは難しいが、折に触れて若干試みている。

2. 本書の構成と目的

第1章では板碑の定義に関わる膨大な研究史を整理する。第2章以下との重複は否めないが、第1章で本書の問題意識を明らかにしたい。序章でとりあげるべき内容を多く含むものの、研究史の中での本書の位置づけを明確にするためである。

言うまでもなく、板碑研究のメッカは「武蔵型板碑」を擁する関東地方にあり、早くから水準の高い研究が進められていた。板碑とは何かを問いかける「板碑起源論」も盛んに議論され、第1章でも研究史を踏まえながら板碑の起源論について私見を述べてみた。

第2章は、九州の整形板碑を整理しながら、各地の地域性を明らかにしたあと、自然石板碑の諸特徴を指摘する。整形板碑は板碑製作に適した軟質石材が産出される凝灰岩地帯や安山岩地帯である九州東南部に多く見られるのに対して、自然石板碑はこれらの石材の分布が乏しい九州北西部に多く確認できる特徴がある。この両者は分布をみる限り、相互に補完しあい、流行地域を異にする傾向をもつ。本章ではそれぞれの地域の整形板碑と自然石板碑の具体例を整理することにより、各地の板碑文化を理解するための下地としたい。

第3章では、整形板碑の形態的特徴を明らかにし、利用されている石材の問題にも言及する。整形板碑は型式論的にアプローチするうえで様々な属性を有する考古資料である。これらの諸属性の特徴、また属性間の関連性をみていくことにより、それぞれの時代特有の板碑に論及できる。もちろん石材の違いが要因の一つでもある地域性はみられるものの、地域性をこえた共通の要素は多